

— そ の 他 の テ ー マ —

入試研究の動向に関する上記の諸テーマに含まれない項目として、昭和60年度以降の大学入試、高校側等との懇談、国家試験（医師）、地方公務員試験等の4項目について、調査研究の概要を記すことにする。

昭和60年度以降の大学入試 新学習指導要領に基づく最初の入試ということで、全学的に科目配点を変更したある大学で、昭和59年度に受験し、昭和60年度に再度受験した受験生について、昭和59年度入試の得点と昭和60年度入試の得点との相関を調査している。その結果は、昭和60年度は過去4か年度（昭和56～59年度）の場合とほぼ似た分布であったことを報告している。

高校側等との懇談 入研協におけるプロジェクト研究の一つ「教育制度における大学入学試験の位置づけに関する研究」（代表 中島直忠 大学入試センター）において、理工系大学・学部における入学者選抜試験のあり方に関する高等学校教諭の意見調査が行われた。その結果の一部を紹介すると、入学試験において「小論文を課す」、「高等学校の調査書を用いる」、「面接試験を行う」に賛成や、「推薦入学は好ましい」

が半数あるいはそれ以上あるのが特徴的であったという。

ある大学では、高等学校新教育課程に関する大学・高校懇談会で、新教育課程移行後の高等学校における教科・科目の選択と学習の実態についての報告・討論、ならびに入試科目削減の是非、進路指導にかかわる問題点などについて討論されたことが報告されている。

国家試験（医師） 2大学で、入試（客観テスト方式の1次試験と、記述方式の2次試験）の成績、2次試験の特定科目の成績などと、在学6年間で卒業できたかできなかったか、医師国家試験に合格したか合格しなかったかの分布を調査している。また、在学6年間で卒業できた学生の基礎医学成績および臨床医学成績と、卒業後最初の医師国家試験における合否の相関を調査している。

地方公務員試験等 ある大学では、教育学部の学生について、共通第1次学力試験制度実施前の入学生と実施後の入学生を対象に、県の教員採用試験（第1次試験）の合格率を比較することにより、学生の質の経年的変化を客観的に把握しようと試みている。